

# ふるさと見て歩き

第52回

## 土手稲荷神社 の石造物

◇水害がもたらした文化遺産

前号では、久慈川の洪水によってたびたび流され、移転を繰り返した土手稲荷神社の遷を追いました。この土手稲荷神社の境内には、洪水がもたらした貴重な文化財が存在

します。社殿左奥に祀られている二十三夜塔の石碑と馬頭観音、そして石棒（現在は歴史民俗資料館山方館に寄託・展示）です。二十三夜塔は文政四年（一八二二）の銘があります。勢至菩薩を本尊とする月待ちの講で、勢至菩薩の縁日二十三日にちなんでこのように呼ばれます。近隣の人々で講を作り、二十三日には持ち回りで宿になった家を集まり、本尊の掛軸を掛け、月の出を待つて礼拝し、飲食をとものにします。月待ち塔は、十三夜から二十九夜までほとんどすべてがみられますが、多くは十九夜塔と二十三夜塔です。講の主体も老若男女それぞれで、祭日を思い思いに楽しみました。また六十日に一度の庚申の日

に宿になった家に集まって夜明けまで寝ずに過ごす庚申講（オゴウシンサン）なども広く行われ、現在も続いている地域もあります。馬頭観音は、「馬頭尊」、「馬力神」といった石碑同様に、農耕や運送などでなくてはならない存在だった馬の供養のため建てられた物で、市内各所でみられます。土手稲荷神社の境内の馬頭観音は明治三十二年（一八九九）に、近くに住む為我流柔術の師範だった木村鉄次郎によって建てられました。



▲二十三夜塔と馬頭観音

◇県内有数の大型石棒

土手稲荷神社の境内には大型の石棒が祀られ、信仰されていました。防犯上の理由から現在は歴史民俗資料館山方館に寄託されていますが、それまでは写真のように二十三夜塔の横に立てかけられていました。石棒は棒状の磨製石器で、一〜二mほどある大型のものから三十cmに満たない小型のものまで大きさは様々で、形状も両端に頭部をもつもの、一端のみ頭部のあるもの、頭部を持たないものがあります。関東甲信地域を中心とした広い地域で出土していて、茨城県でも県南を中心に出土しています。用途については諸説がありますが、男性器を連想させる形象を持つため、生殖や繁栄の象徴として祭祀や儀式に使用されたと考えられています。

土手稲荷神社境内の石棒は、縄文時代中期後葉（四千〜五千年前）のものとして推定され、一端に頭部を持つ形態で、全長が九十一cm、最大周六十cm、最大径約十九cmとかなり大型です。報告書などで確認出来るものでは県内最大級と言えます。もともと、発掘調査を経ずに採取された石棒は報告されないため、もつと大型の物が存在する可能性もあります。

石棒には、胴体部に火を受けた跡がみられ、これは、石棒を使った祭祀のあと、使用の終わった石棒の効力を否定するため、と考えられています。そして他の遺跡からも同様に燃やされたり砕かれたりして（燃焼の結果割れてしまった物もあります）、廃棄されたと思われる石棒やその破片を見ることが出来ます。材質は小貫地区の久慈川で採取される砂岩です。まさに地元産の石材を使用した優品であると言えます。

◇石造物発見の経緯

これらの石棒や他の石造物は昭和六十年頃、小貫宿地内の河原で砂利を採取していた時に、五〜六mの深さの地中から発見されました。度重なる水害で耕地や宅地に河原の砂利が入り込んだため、耕地整理の時に重機で砂利を採取することになり、その時出土したのが石棒をはじめとする石造物でした。現在も前述の二十三夜塔、馬頭観音、他に三、四の石塊が社殿横に並んでいます。地元の方によれば、大型石棒に付随するような大型の石皿も出土して祀られていた、とのことですが、現在は不明です。

石棒をはじめとするこれら数個の出土品は地元住民によって、身近な土手稲荷神社に納められ、信仰されてきたのでしょうか。



▲石棒

※木村和英さん、檜山正昭さんに聞き取り調査にご協力いただきました。

歴史民俗資料館大宮館 ☎52-1450